

短い自伝

第一次大戦後、当時私を少々問題視していた友人たちのために私は二度、私の生涯のいわば全体像を、なかばフモリストを模しながら、メルヒェン風に書き示そうと試みた。気に入った方の「魔術師の幼年時代」は完成されなかった。もう一篇、ジャン・パウルにならって未来を先取りした「想定自叙伝」の試みは、一九二五年、ベルリンの「ノイエ・ルントシャウ」に発表された。これに軽微の変更をわずかに加えたものが本篇である。この二つの作品をどうにか結び付けようとは何年か考えてはいたが、トーンも雰囲気も極めて異なった両者を折り合わせる方策は見つからなかった。

ヘルマン・ヘッセ
石橋邦俊 訳

近代が終わり、中世が回帰し始める僅かに前、射手座の星のもと、親しげな木星の光を受けながら、私は生まれた。私の誕生は七月の暖かな日、夕べ近くであったので、その時の気温は、終生私が無意識のうちに愛し、求め、また、それが無い時には苦痛を覚えたものであった。私は寒冷の地には決して生活できなかったし、生涯すすんで行なった旅行はすべて南に向かった。私は敬虔な両親の子供であった。両親を私は愛していた。だが、まだ幼い時に第四の戒律を教えられなければ、もっと愛しただろう。困ったことに命令というものは、それが正しく、また良いものであっても、常に私にただならぬ影響を及ぼしたのである。生来子

羊のようにおとなしく、シャボン玉のように靡きやすい私が、命令となると、殊に子供の頃は、常にどんなものにも反抗してしまつた。「しなさい」と耳に入れば、何もかもが私の中で向きを変え、そして言うことを聞かなかつたのだ。この性格が学校で大きく災いしたのは、想像できるだろう。「世界史」と人が呼ぶあの愉快な学科で先生は私たちに、自分だけの定めを自らに課し旧来のきまりを打破した人間が常に世界を治め、導き、変革してきたと説き、また、こうした人物は尊敬に価すると言うくせに、これはほかの授業全部と同様、うそだつた。意図の善し悪しは別として、生徒の誰かが勇気を見せてなにかのきまりか、きまりと言うほどでなくともつまらない習慣や傾向に歯向かうと、教師は我々の模範として賞揚するのではなく、罰し、嘲り、卑怯な権威を傘に彼を抑えこんだのである。

辛い私は、人生に於いて大切なこと、価値のあることを学校に入る前に学んでいた。私の感覚は繊細で明

確だつた。この感覚は信頼できたし、そこから多くの楽しみが引き出せた。後年、救い難いほど形而上学の誘惑に屈し、ときに自分の感覚を節し無視しようとした時にも、視覚的聴覚的な細やかなイメージは常に寄り添い、一見抽象的なところでも、思考の世界に生き生きと働きかけてきた。つまり、私は人生に対する一種の防具を、既に述べたように就学するずっと以前に身に着けていたのである。生まれた町、鶏の駆けまわる庭、森、果樹園や小さな町工場を隅々まで知っていた。いろいろな木や鳥、蝶を知っていた。歌を歌い、歯の隙間を使って口笛も吹けたし、ほかに生きるために価値のあることがいくつもできた。そこに学校の学科が加わつたわけだ。私にしてみれば、それは易しくて楽しかった。特にラテン語は本当に面白く、ドイツ語で詩を作り出したのほとんど同じ時期にラテン語でも詩を書いていた。体裁を繕い嘘をつく術を教わつたのは二年生の時だ。ある教師と臨時教員がわたしにこの能力を所有させてくれたのである。子供特有の信

頼と物事を隠さない性格のせいで、他人のわるさを背負いこむ羽目になったのである。この二人の教育者は見事に教えてくれた、真実への愛と正直さは、彼らが生徒に求めようとする性質であると。ある悪事の濡れ衣を私に被せたのである。クラスの中の、本当に何でもない、私には全く無関係の悪事だった。私に無実の罪を自白させることはできなかつたので、何でもないことが国家の一大事になった。責め苦しめて彼らから叩き出したのは彼らの望んだ自白ではなく、教師という階級の誠実さに対する信頼のすべてだった。辛い、後年、私は尊敬に価する本物の教師を知ったが、事は起こってしまったのであり、学校の教師のみか、あらゆる権威に対する私の関係が歪められたのである。総体的に見れば、学校時代の最初の七、八年の間、私は良い生徒だった。少なくとも私はいつもクラスの上位に座っていた。学校と徐々に折り合わなくなっていくのは、一個の人物となるべく定められている者に必ず訪れる、例の闘いが始まってからである。尤も、こ

の闘いの意義を理解したのは二十年も後である。当時それは、望んだわけでもないのにただそこにあり、恐ろしい不幸となって私を取り囲んでいたのだ。

説明しよう。十三才の時、私ははつきりと自覚した、詩人でなければ何にもなるまい、と。しかし、この明確な自覚に、時とともにもうひとつの辛い洞察が加わってきた。教師、牧師、医者、職人、商人、郵便職員にはなることができる、音楽家も画家も建築家でも良い、世のすべての職業には道というものがあるのだ、前提とされるものがあり、学校があり、初心者のための授業がある。唯一、詩人になるには、それがないのである。詩人であることは許されている、名誉ですらある。つまり、詩人として成功を収め名を成すことだ（ただし、大抵は残念ながらも死後の話なのだけれども）。だが、詩人になるというのは不可能である、詩人になろうと望むのは恥ずかしい笑止の沙汰なのだ、私はすぐに悟つたのである。状況から学ぶべきことを、私はすぐさま学び取っていた。詩人とは、詩人であるのは

許されても、なることは許されないものなのである。さらに、自分の文学的才能や文学に興味を持つなど、教師にとつては怪しからぬ事であり、不信か嘲りを、また時にはもう立ち直れぬほどの侮辱を招くのだ。詩人は、英雄の場合と同じだった、力や美や高潔な心を備え、人並み外れた人物や行為の場合と全く同じだった。過去にあつては素晴らしく、教科書は贅辞で溢れているが、現実には現れれば憎まれるのである。そして教師とは、おそらく、自由で優れた人間の成長と輝かしく偉大な行為が行われることを可能な限り阻止すべく、教育され任命されているのである。

かくして、私と私の遙かな目標の間には、いくつもの亀裂が走っているばかりだった。すべてが不確実になり、すべてが価値を失ってしまった。唯一残ったのは、私は詩人になりたいということ、困難であれ容易であれ、笑止であれ名譽であれ、詩人になりたいのだという一事だけだった。この決心は、いや、むしろ宿命は、表には次のように現れた。

十三才、例の闘いが始まったばかりの時、両親の家でも学校でも私の素行はあまり満足できるものではなかったので、私は別の町のラテン語学校に放逐された。一年後、私はある神学校の生徒になり、ヘブライ語のアルファベットを学び、内部強勢記号の何たるかをようやく把みかけていた、すると突然わたしの中に嵐が巻き起こり、そのため、修道院付属学校を逃げ出し、重い監禁の罰を受け、結局神学校を退学してしまつたのである。

その後しばらく、あるギムナジウムで勉学を続けようと試みたが、そこでも結末は監禁と退学だった。それから、商人の見習いを三日やり、再び逃げ出し、昼夜行方を晦まして両親に心配をかけた。半年間、父の手伝いをし、次の半年は塔の時計を制作する町工場の実習生をやった。

要するに四年以上の間、私をどうにかしようとしたすべてが否応なく失敗したのだ。私を引き止めようとする学校はなかった、私が長く続けられる仕事はなかつ

た。私を有為の人間にしようとした試みの結末はどれも失敗であり、幾度かは世間に恥じを晒したり事件になったりもした、逃げ出したことも追い出されたこともあった、それでも皆、私にながしかの良い天分と、更に、幾分かのまっとうな意志まで認めてくれた。私の方も常に、まあ熱心ではあったのである（悠々自適という優れた徳に常に敬意を払ってきた私だが、未だその大家にはなれないでいる）。学校での勉強は失敗だったが、十五才の時、私は自分自身の教育を自覚して積極的にやり始めた。幸いにも父の家には、広間ひとつ分にもなる祖父の莫大な古書の蔵書があり、とりわけそこには十八世紀ドイツの文学と哲学のすべてが含まれていた。十六才から二十才までの間、私は初めての文学的習作を大量に書き留めたが、また、世界文学の半分を読破し、言語、文化史、哲学を、通常の勉強を優に満たすほどのしどきで学びとっていったのである。

その後、書店に勤め、ようやく自分のパンを自分で

賄えるようになった。かくて、機械工の時にきんざん苦勞させられた万力や鋳鉄製の歯車より、ともかくも書物に対して頻繁かつ良好な関係を持ったわけである。新刊、最新刊の文学の中を泳ぎまわる、いや、そこに耽溺するのは、初めのうちは陶醉にも似た喜びだった。だが無論、暫く経つうちに気付いたのである、精神に関る事柄では単に現在を、最新のものだけを相手にしては、そのような生活は無意味であり堪え難い、かつて在ったもの、歴史や過去のもの、古代のものに絶えず接してこそ、精神の営みというものが初めて可能になるのだと。あの最初の悦びから醒めてしまうと、今度は最新事の洪水を逃れ古いものに帰りたいたいという抑えきれぬ気持ちが生まれていた。私は書店から古書店へ移ることにした。しかし、この職業も生活に必要な間だけだった。二十六才、文学の世界での初めての成功を機に、私はこの職も捨てたのである。

さてこうなると、多くの嵐に見舞われ、多くを犠牲にしたが、私は目標に到達したのだ、不可能と見えて

いたのに、どっこい、詩人になったのであり、世間との苦しい闘いに私は（一見）勝ちを取めたのである。

幾度ももう駄目かと思われた学校時代、青年時代の苦々しい思い出は忘れられ、微笑された。私に望みを失っていた友人や血縁の人々も、今は私ににこやかに笑ってくれる。私は勝者なのだ、値打ちのかけらもない馬鹿なことをしても、皆、素敵だと思ってくれる、私も私自身に魅せられていた。この時になって初めて私は気付いた、ひどい孤独と禁欲と危険の年月を私は生きてきたのだ。称賛の暖かな微風に私は陶然とした。そして満ち足りた人間になり始めていた。

暫時、私の生活は外見には静かで快適に過ぎていった。妻と子供、家と庭を持った。本を書き、好ましい作家として通り、世間と平和に暮らしていた。一九〇五年、第一にヴィルヘルム二世の専横に反対しようとした雑誌の創刊に関わったが、この政治上の目標を私は、まず真剣に受け止めてはいなかった。スイス、ドイツ、オーストリア、イタリアに素敵な旅をした。何もかも

順調であるように見えていた。

そこへ、あの一九一四年の夏が来たのである。内も外も突然、すっかり変わってしまったようだった。世間とのこれまでの順境は不安定な地盤に立っていたことが露呈し、そして、今度は逆境が、大いなる教育が始まったのだ。人の言う「大いなる時代」が始まっていたのである。この時、他のどんな人と比べても、私のほうが覚悟が出来ていたとも、時代にふさわしかったとも、良く身を処したとも言いがたい。唯一人々と異なっていたのは、他の多くの人が持ち合わせていたあの大きな慰め、つまり「熱狂」が私にはなかったという一事だった。そのため、私は再び独りになり、周囲と対立するようになった。またもや学校に入れられたのだ、またもや私自身と世間に対する満足を忘れねばならなかったのだ、そしてこの経験を経て初めて、數居を越え、資格あるものとして人生に歩み入ったのである。

大戦初年の小さな経験は決して忘れられない。私は

ある大きな野戦病院を訪問した。自ら志願して、変わってしまつた世界に何とか意味のあるかたちで参加できないかと思つたのだ（当時はまだそんなことが可能だと思えたのである）。その傷病兵病棟で私はひとりの未婚の老婦人と知り合つた。以前は金利で生活する良い身分だったが、彼女は今、この病院の看護婦となつて働いていた。この大いなる時代を経験できるのをどれほど喜びとも誇りとも思っているか、彼女は感動的なほどに熱を込め鑣々語ってくれた。それは良くわかるのだ。老独身婦人のだらけた、全く自己中心的なその生活をまだ価値のある活動的な生活に変えるには、この婦人には戦争が必要だつたのだ。しかし、瀕死の人々、手足を失つた人々の横たわるホールとホールをつなく、あるいは負傷し、あるいは銃で撃たれ四肢の歪んだ兵士で溢れた回廊で自分の幸福を語る彼女の話を聞いていると、私は心臓がねじ切れそうだった。このおばさんの話は良くわかる、だが、共感も是認もしようがなかった。兵士が十人負傷する毎に、こんな舞

い上がった看護婦が出来るのだとするならば、この婦人の幸福は些か値が張りすぎるのではないのか。

そう、大いなる時代への喜びを私は共に出来なかつた。そこで、初めから戦争の重荷に押しひしがれ、一見外部から青天の霹靂然と降りかかつてきたこの不幸に絶望的に抗っている私に対し、周囲は世を挙げて、まさに当のその不幸に嬉々として熱狂しているかの様相を呈するということになつてしまつた。さらに、戦争の恵みを説く文学者の新聞記事や大学教授の扇動文、著名な詩人が安閑と部屋に座しつつものした戦争詩を眼にすると、一層惨めな気持ちになつた。

一九一五年のある日、この惨めな思いがつい口から漏れ公になつてしまつた、それに、いわゆる精神的な人々までが憎しみを煽り嘘を広め大きな不幸を贅美するばかりなのはいかげなものかという一言が。随分控えめにおおずと口にした批判だつたのだが、その帰結は、祖国の新聞から捺された裏切り者の烙印であつた。私にはひとつの新しい体験だつた。新聞とは多く

の交渉を持っていたが、多数の人々から唾棄されると
いう役回りは、それまで知らなかったのだ。この非難
記事は故郷の新聞二十紙に掲載され、新聞界には多く
の友人がいるものと思っていた私の弁護に乗り出して
くれたのはわずかに二人だった。古くからの友人たち
が言ってきた、彼らは胸元に蛇を飼っていたのだ、今
後この胸の鼓動は皇帝と帝国のためのものである、私
のためではない。未知の人々からは侮蔑の手紙が大量
に送られてきた、そして書店は、これほどに唾棄すべ
き思想信条を持つ作家は彼らにはもはや無であると知
らせてきた。こうした手紙のおかげで私はあるアクセ
サリーと馴染みになってしまった。当時初めて見たの
である、小さな円の消印にこう書かれていた、「神よ、
イギリスを罰したまえ」

こうした誤解を大いに笑ったと考えられる読者もあ
ろう。だが、それは出来なかった。それ自体は実に些
細なこの経験は、私の人生で二度めの大きな変容となっ
て実を結んだのだ。

覚えておいでだろうか、最初の変容は詩人になると
いう決意が自覚された瞬間に始まった。従前の模範生
ヘッセはこの時から問題児になった。罰を受け、放擲
され、何一つ良いことはせずに、自分でもどうなるの
かわからず、両親にも数々の心配をかけた。すべては
ただ、現にそこにある（あるいは、あると見える）世
界と自身の心の声に、何等かの和解の可能性を見出せ
なかったからである。戦時の今、それが改めて繰り返
されたのだ。平穩に折り合ってきた世界と自分が再び
齟齬を来していた。再び、すべてがうまく行かなくなっ
ていた。再び、私は孤立していた、惨めな状態になっ
ていた。再び、私が考え口にするすべてが敵意を持っ
て誤解されるようになっていた。再び、私がかくある
べきとも、理性的とも、善とも思うものと現実との間
に埋めようのない断絶が口を開いていた。

しかし、今度は私もじつくりと考えた。ほどなくし
て、私の苦しみの責任は外部ではなく私自身に求め
るべきことが判明した。私にはよくわかったのだ、全

世界の狂気と野蛮を非難する、そんな権利は誰にも、神にさえもない、ましてや私などには。すなわち、世界の動きが私と噛み合わぬのならば、それは自分の中に非常な不整合があるからに相違ない。そして確かに、大変な不整合があつたのである。この自分の中の不整合に手をつけ整理しようとするのは、楽しくはなかつた。ここで何よりも、この一事が明らかになつた、これまで私の私と世界との平和を私は大変な高値で贖つたというだけではない、この平和はおよそ世の外面上の平和と同じく、腐つていたのだ。青年期の長く苦しい闘いを経て自分の場所を世界に勝ち得、詩人になつたのだと私は思い込んでいた。しかしその間に、成功と順境は私にありきたりの影響を及ぼしていた。よく見れば、この詩人様は娯楽作家と大差ないのである。順風満帆に過ぎたのである。さて、逆境とは常に潑刺たる優れた教師だが、今回はこの逆境に十分に気を配つた。そして私は徐々に、世間の営みはその流れのままに任せることを学び、かくして、全体の混乱と罪に対する

私自身の関与という問題に集中できるようにした。この問題との取り組みが私の書いたものにどう現れているのか、それは読者に読み取つて頂くよりない。私は今もひそかな希望を抱いている、やがて私の国の人々も、全体ではなくとも、しかし責任感を持ち目覚めた極めて多くの何千もの人が各々同様の試練を終え、邪悪な戦争、邪悪な敵、邪悪な革命を嘆いたり罵つたりする代りに、心の中でこう自問するようになる、「それに関わつた自分の罪はどうなのだろう」「どうすればまた罪のない身となれるだろう」罪を他人に求めるのを止め、自分の苦しみと自分の罪を認識し最後まで苦しみぬけば、人はいつでも再び罪のない身となるのだから。

新たな変容が私の書くものや生活で外側に現れるようになると、友人の多くが首を振つた。私から離れていった者も多かった。家を失い家族を失い、他の生活を快適にするものや財産を失つたが、これもそうした私の生活の変化の一つだった。一日々々別れを告げ、

一日々々、自分がそれを耐え、生き続け、もう苦痛と幻滅と喪失しかもたらさぬかに見えるこの奇妙な人生の何かをそれでも愛しているのに驚いていた毎日だった。

だが、付け加えておこう。戦時中にも私には、何かしら良い星とでも守護天使とでも言うべきものが付き添っていてくれた。自分の苦しみのせいでひどく孤立していると感じ、変容が始まるまでの間、毎時間ごとに自分の運命を厭わしく思い呪っていたが、当のその苦しみが、苦しみしか見えなかったその事が、外界に対する防壁とも鎧ともなってくれたのである。つまり、戦争の年月を私は、政治、スパイ、買収、相場の駆け引きが、それ自体すら当時世界でもほとんど見られなかったほどに集中していたひどい環境で過ごしたのだ。ベルン、ドイツと敵国と中立国の外交の交差点、一晩で人間が溢れかえる都市、それも、外交官、政治的エージェント、スパイ、ジャーナリスト、買い占め商人、闇ブローカーたちが。私は外交官や軍人と付き合いがあった。その上、敵国も含め、多くの国の人々が行き

来していた。私の周囲の気は、スパイと逆スパイ、盗聴、陰謀、政治や個人を巡る目まぐるしい活動の織り成す、類例のないネットだった。そして私はいえ、その間中全く何一つ気付かなかったのだ！私は盗聴され、探られ、スパイされていた。ある時は敵国に、ある時は中立国に、またある時は自国の人間に疑われていた。そして、すべて気付かなかったのだ。あれこれと耳にしたのはずっと後のことである。そんな環境の只中で、どうして精神的にも肉体的にも傷を受けずに生きて来れたのか、わからなかった。だが、そうなっていたのである。

私の変容の完成と試練の苦しみの頂点は戦争の終結と同時だった。この苦しみは、戦争とも世界の運命ともはや何一つ関わっていないかった。ドイツの敗北も（そんなもの、外国に居る私たちは二年前から確信を持って待ち受けていたのだ）、当面もはや何のショックもたらさなかった。私は自分と自分自身の運命に完全に沈潜していた。尤も、時折感じてはいたのであ

る、これは人類の運命全体に関することだと。世界の戦争のすべて、その殺人欲のすべてを、その軽薄のすべて、その粗野な快楽欲のすべて、その臆病さのすべてを私は自分自身に見出した。まず自分への敬意を、次に自分自身への侮蔑を失い、ただただ混沌をその果てまで凝視するよりなかった、この混沌の彼岸に自然を、無垢を再び見出せるかもしれぬという、燃え立ち、またあるいは消える希望を抱きながら。真に自覚に達し、目覚めた人間は誰しも、一度、あるいは数度、荒野をわたるこの狭い道を歩むのである。経験のないものにそれを語っても徒勞であろう。

友人が去っていくのは、しばしば悲しかったが、不快ではなかった。むしろそれは私には、私の道の確証だった。以前の私は感じのいい人間であり詩人だったが、いま抱えている問題はとても楽しめないと言うこの友人たちは正しいのだ。趣味や性格は当時の私に、とっくに問題ではなくなっていた。私の言葉を解する者は一人もいなかった。書くものに美と調和がなくなっ

たと私を難ずるこの友人たちは正しいのだ。そんな言葉には笑うよりなかった。死の宣告を受け、あたりの壁が崩れる中を命からがら駆け抜けている者に、美や調和が何だろう？ あるいは私も、生涯信じこんでいたのとは異なって、全く詩人などではなかったのかも知れない、文学の営みなど、すべては単なる気の迷いではなかったのか？ 言うまでもないこと！ それももう大した事ではない。この自分の中の地獄行の中で眼にしたものは、既にほとんどが無価値になっていた、ガラクタと化していた。ならば自分の職業、自分の才能についての思い込みもそうだろう。そんなものが何だというのだ。思えば上がりどちやちな喜びに膨れあがって、かつて自分の使命だなどと思っていたものなど、実はもうありはしない。自分の使命、いや、自分の救われる道を、私はどうに詩や哲学や、何かその手のスペシャリストの玩弄物の領域に求めるのを止めていた、ただ、もうあるかなきかの、自分の中で真に生きているもの、真に強いものにその生を生きさせること、私

の中でまだ生きていると感じられるものに絶対に誠実であること、これしかなかった。私の中のそれこそが生命であり、それこそが神なのだ。時が経ち、命にかかわるほどの強い緊張のこうした時期が過ぎてしまえば、すべては奇妙なほどに異なってみえてくる。その頃のものの実体もそれに付された名称も、もう意味を失っているのだ。こうして、一昨日は神聖であったものの名が、ほとんど滑稽に響くこともあるのである。

私にとってもようやく終戦が訪れた一九一九年春、私はスイスの辺鄙な一隅に引き籠り、隠者となった。

私は終生、インド・中国の知恵の教えを熱心に学び（この性向は父母、祖父母から受け継いだものだが）、

また、私の新しい経験を、一部、東洋の象形言語を借りて表現したりしたので、よく「仏教徒」と渾名されたが、これには笑うよりなかった。根本において私はどんな宗教よりもこの宗教から遠い位置にいるのを自覚していたからである。だがそれでも、いくら後からようやく気付いたのだが、そこには何かしら正しいも

の、一片の真実が蔵されていた。仮に人間が自分でひとつの宗教を選びとって良いとすれば、私は心の奥底の憧れに従って、儒教やヒンズー教、あるいはローマカトリックといった保守的な宗教に就くだろう。しかしこれは対極への憧れからであって、生得の親近性の故ではない。私が敬虔なプロテスタントの家に生まれたのは偶然ではない、本性上、心の底からプロテスタント（抗議する者）なのだ（今日のキリスト教新教諸派に対する私の根深い嫌悪とこれは何ら矛盾するものではない）。真のプロテスタントとは、その本性上、存在より生成を善しとするため、他のあらゆる教会同様自分自身の教会にも抗議を申し立てる。この点、仏陀もプロテスタントと違って良いのである。

あの心の変容以来、詩人であること、また、自分の文学上の仕事に価値があるということへの信念は根を失ってしまった。書くことは、もう本当の喜びではなくなつた。しかし人間は何らかの喜びを持たねばならない。どんなに苦しい時でも、それを私も要求したの

だ。正義や理性、人生の意味、世界の意味、それは諦めて良かった。こんな抽象化など何一つなくても、世界は見事に動いている、先刻承知なのだ。だが、ほんのささやかな喜びを諦めるわけにはいかない。このわずかな喜びを求める心、それは、なおも私が信じ、また、そこから新たに自分の世界を再建しようと思っ

ている、内なるあの小さな炎の一つだったのである。私の喜び、私の夢、私の忘却をよくひと瓶のワインに求めた、そして大抵効果があった、それ故ワインを称えよう。だが、満ち足らわしてはくれなかった。すると、何と言うことだ、ある日私は全く新しい喜びを発見したのである。四十才にして、絵を描き始めたのだ。自分を画家だなどとは思わないし、そうならうというのでもない。だが、絵を描くのは本当に素晴らしい。朗らかな、辛抱強い人間を作ってくれる。ものを書く時のように指が黒くなりほしくない、赤や青になるのだ。この絵を描く趣味にも、多くの友人は眉をひそめた。この点、私は幸福とは言えない。いつも、本当に必要

な、私を幸福にしてくれる素敵なことを企てると、人を不愉快にしてしまう。いつまでも元のままでいること、顔の変わらぬことを人は好むのだ。しかし、私の顔はそれを拒むのである、頻繁に変わろうとするのである、それが必要なのである。

今ひとつ別の非難は私にも至当と思える。私には現実に対するセンスがないというのだ。書くものと同じく、私の描く絵は現実には則していない。詩や物語を創る時、私はよく、教養ある読者が書物と呼べるほどの本に求める要求をすべて忘れてしまう、いや何よりも、現実に対する敬意が私にはないのである。思うに、現実とは最も人が意を払う必要のないものだ、現実はいつもいやと言うほどそこにあるではないか、一方、もっと美しいもつと必要なものが私たちの注目と心配りを求めている。現実とは、どんな時にもそれで満足してはならないものだ、偶然なのであり、人生の屑なのである。そしてこいつは、いつも幻滅しか持って来ない、この不毛のチンケな現実というやつは、我々の方が強

いのだと見せ付けて否定する以外に、何とも変えようがないのである。

私の詩や散文にしばしば通常の現実への敬意がないと人は言う、そして私が絵を描けば、樹に顔があり、家は笑い、踊り、あるいは泣いたりするが、当の樹が梨の樹か栗の樹か大抵わからない。この非難は甘受するよりない。正直に言えば私自身の人生すら一個のメルヒェンに思えることが実にしばしばなのだ、時々私は外の世界と私の内面が一種関係しあい響和し合っているのを見、感じるが、それは魔術的と呼ぶよりない。

まだ何度か、私の周りには馬鹿なことが出来た。例えば、有名な詩人シラーについて、一度無邪気な発言をしたが、たちまち南ドイツの全九柱戯クラブから祖国の聖地聖人を汚す者と罵られた。しかしもうここ数年は、神聖なものに泥を塗ったり、人を真つ赤に怒らせることを口にしないうで切り抜けている。これは進歩と言つて良いと思う。

さて、現実なるものは私には大した意味を持ってい

ないし、しばしば過去が現在と同じように私を満たし、また現在のものが限りなく遠く思える時があるのだから、人が大抵行っているように、未来と過去を載然と分かつのも私には不可能だ。私は未来に生きていることが非常に多い。となれば、私の伝記も今日の日で終わりとせず、安んじて先へ続けてよいわけだ。

私の人生がその弧を描き終える様を、手短かに語りたい。一九三〇年までに私はなお教冊、本を書くが、その後はこの生業に永久に背を向ける。私が真に詩人の名に値するか否か、勤勉な若い人が二篇の博士号請求論文で検討するが、答えは出ない。つまり、現代の文学を仔細に観察した結果、詩人を創りなす流体が現代では非常に希薄になっており、詩人と文字書きは最早区別し難いという結論が出されるのである。だが、この客観的な調査結果から二人の学位請求者が導いた結論は正反対だった。一方の好感が持てる方は、こんなに薄くなったポエジーなどそもそも最早ポエジーではない、ただの文字紙は存在に値しないのだから、今

日なお文学と自称しているものを人は、安んじて安楽死に委ねればよいという考えであった。今ひとり、どんなに希薄でもポエジーを絶対的に崇拜している方は、しかし、こんな人物であるから、一人の詩人を不当に扱うよりは用心に何百もの偽詩人を是認する方が良い、その一人はあるいは真正のバルナツソスの血の一滴を有しているかもしれないのだから、と考えた。

私は主として、絵を描き、中国の魔術を研究したが、時とともに音楽にも没頭するようになった。一種のオペラの作曲が後半生の野心となる。人間の生がその所謂現実性に於いてはほとんど問題とされず、いやそれどころか軽んじられ、逆に、神なるものの写し、そのかりそめの衣としての永遠の価値に於いて輝き出すというオペラである。人生の魔術的な把握に私は常に馴染んできた。決して「近代人」ではなかった。私にはホフマンの『黄金の壺』が（いや、ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』にして）も）、どんな世界誌、自然誌の書物より価値のある教

科書だった（と言うより、そんな自然や世界のはなしも私には、いつも美しい比喻と見えたのである）。だがこの時、私の人生はひとつの人生の時にさしかかったのだ。充分以上の分化を遂げ完成した人格に更に分化と彫琢を加えることが既に意味を失い、それに替って、貴重な自我を世界に沈め、無常を見つめつつ時のない永遠の秩序に自己を組み入れるという使命が現れる、あの時である。思想とも生に対する感情ともいえるこのものを表現する手段は、私にはメルヒェンしかないと思われた。そして私はオペラをメルヒェンの最高の形式と考えていたが、おそらくそれは、誤用され死に瀕している私たちの言語の言葉の魔力をもうまとも信じきれぬ一方で、音楽はまだ今日でもその枝に楽園のリングを実らせる力のある、生きた樹と思えたからだろう。私は自分のオペラで、文学では決して完全に実現出来そうもないものをやろうと思ったのだ。人間の生に、得も言えぬほどに美しい高い意味を与えるのである。無垢にして無限なる自然を称え、その歩

みを描いて行きたい、その極点において自然は、必ずや訪れる苦悩に強いられ、精神へ、遙かな対極へ身向きかえるのだ、自然と精神という二つの極の間の生の揺曳を弓なりの虹のように晴れやかに、軽やかに、弧を描くものとして描きたいのである。

しかし残念ながら、このオペラは完成されなかった。文学の世界と同じ事が起こったのだ。私が文学を諦めたのは、言わずにはいられない大切なことがすべて、『黄金の壺』や『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』に、私に出来るよりも何千倍も純粹に既にかかっているのを読んだためである。オペラでも同様だった。数年をかけ音楽を学び、幾つもの台本の試作を終え、私の作品のそもその意味と内容をもう一度、可能な限り詳細に思い描こうとしたまさにその時、突然気付いたのである、私がオペラに書き留めようとしているものは、疾うに『魔笛』が見事に音楽化しているものに他ならないと。

こうしてこの仕事も頓挫し、私は魔術の実践に没頭

するようになった。芸術家という天職が自分の思い込みであり、『黄金の壺』も『魔笛』も書けぬとなれば、ともかく私は魔術師たるべく生まれたのだ。老子や易经といった東洋の道に永年親しんできたため、現実なるものの偶然性と可変性を私は十分心得ていた。かくてこの現実を、私は意のままに撓めたのである。正直なところ、とても楽しかった。また、白状せねばならないが、私は節を守って人が白魔術と呼ぶあの愛らしい花園に終始いたわけではない、私の内なる小さな生きた炎のために、時に黒の側面へ導かれたこともあったのだ。

七十才を越え、漸く二つの大学から名誉博士号を授与された後、若い娘を魔法でかどわした咎により私は裁判にかけられた。留置場で私は絵を描く許可を願い出、許された。友人の持つて来てくれた絵の具と筆を使って、牢獄の壁に小さな風景を描いた。こうしてもう一度、芸術の世界に帰って来たのである、芸術家として以前に経験したすべての挫折を挙げて、この

上もなく美味なこの杯を再び仰ぐ私の手を止めるなど、
 毫も出来なかつたのだ。再び遊ぶ子供のようになり、
 愛らしい小さな世界を作り出し、それを心の限りない
 喜びとする私を、再び処世知や抽象をすべて捨て去り、
 原始的な創造の快楽を探し求める私を遮るなど、毫も
 出来なかつたのだ。こうして私は再び絵を描くように
 なつた。絵の具を混ぜ、筆を浸し、今一度、この限り
 無い魔法のすべてを、晴れやかに楽しげに響く朱色、
 豊かに透明に響く黄色、心を揺する深い青の響きを、
 そしてそれらの混合の音楽を、その極端に位置する青
 ざめた灰色に至るまで、陶然と飲み干した。幸福に、
 無邪気に私は自分の創造の戯れを戯れ、そして、自分
 の獄舎の壁に風景を描いたのである。この風景には、
 私が人生で喜びを覚えたほとんどすべてが含まれてい
 た。川や山、海と雲、収穫する農民の姿、他にもたく
 さんの美しいもの、私が楽しめるものが。絵の中央に
 はほんとに小さな鉄道が走っていた。山に向かつて、
 林檎をかじる芋虫のように、もう頭を山に突っ込んで

いた。機関車は小さなトンネルに入ろうとしている。
 綿毛のような煙が、暗いトンネルの口から出ていた。
 自分の遊びにこんなにうっとりしたことはなかつた。
 再び見つけた芸術がこんな調子だったものだから、自
 分が囚人であり被告であることも、ほぼ確実にどこか
 の刑務所で人生を終えるよりないことも忘れていた。
 そればかりか、時には魔術の練習まで忘れ、ちっぽけ
 な樹や小さな明るい雲を細い筆で描けば、もうそれだ
 けで立派な魔法使いになつたように思えた。
 その間、所謂現実とはとうとうこいつとは全く仲違
 いしてしまつていたのだが、私の夢をくり返し破壊し、
 これを侮蔑しようと躍起になつていた。ほとんど毎日、
 誰かが私を呼び来て、あちこちの不愉快極まりない部屋
 へ連れていくのだ。そしてそこでは、たくさん書類
 に埋もれた不快な人間がわたしを問ひ質し、一言も信
 用しようとせず怒鳴りつけ、ある時は三才の子供の
 ように、またある時は海千山千の古狸のように私を扱
 うのだ。なにも告訴されるまでもない、役所や書類や

公文書の、この奇妙な、全く地獄めいた世界とは簡単に知り合いになれる。奇妙なことに人間は自ら幾つもの地獄を創り出さずにはいらなかったが、ありとあるその地獄の中でも、私にはこいつがいつも最も地獄的に思えていた。引越したり結婚しようとしたりすれば良い、パスポートか戸籍を取ろうとすれば良い、即座にこの地獄の只中だ。紙で出来たこの世界の息苦しい部屋で嫌な時間を過ごさねばならぬ、退屈しきっているくせにせわしない、陰鬱な人間にあれこれと訊かれたり怒鳴られたりするのだ。明々白々のわかりきった言葉も不信以外のものには出会わない、小学生か何かのように、また、何か犯罪者のように取り扱われるのだ。まあ、誰しもご存知のことである。私の絵の具がその度に慰め、楽しませてくれなかったら、私の絵が、あの小さなきれいな風景がくりかえし空気に生気を与えてくれなかったら、私はとづくに書類の地獄で窒息し木乃伊になっていたろう。

ある時、またもや看守がくそ面白くもない召喚状を

手に、あの幸福な仕事から私を引き離しに来た時、私は牢獄の絵の前に立っていた。私はこうした物事全部に、この精神のかけらもない残酷な現実すべてにある種の疲労、何か吐き気のようなものを感じた。苦しみにケリをつける時が来たと思えた。邪魔されずに自分の無邪気な芸術ごっこを続けることが罷りならぬと言うのなら、人生の幾年かを捧げた、あのもつと真剣な術を使うよりない。魔術無くして、この世界は耐えられるものではないのだ。

私は中国の魔法の書の文言を思い出し、一分間息を止め、現実という迷妄を離れた。それからこやかに看守に頼んだ、もう少し待っては頂けまいか、絵の中の汽車に乗ってあちらで調べものをしなければならぬいから。連中はいつもの調子で笑い出した。私を精神障害者だと思っているのである。

そこでわたしは自分を小さくして絵の中に入った。小さな汽車に乗り、小さな汽車で黒い小さなトンネルに入ってしまった。しばらくは丸い入り口から綿毛のよ

うな煙が出ていたが、煙はやがて薄くなり消えて行き、煙とともに絵が消え絵とともに私も消え去った。

後に残るは呆然自失たる看守たちであった。

訳者記：ヘッセの „Kurzgefäbter Lebenslauf“

(一九二四)を訳出した。

一九九五年冬、ヘルマン・ヘッセ研究会の編訳によるヘッセの書簡集『混沌を生き抜くために』が毎日新聞社より刊行された。筆者の勤務する九州工業大学情報工学部の講義「近代文化論」のテキストとしてこの書簡集を使用するに際し、受講生にヘッセの人となりについて一定の共通のイメージを与えると同時に、文学的文章にさほど親しんでいるとは思えない彼らの反応を測りたいと思ったのである。この短い自伝は、筆者の知る限りでも既に高橋健二の邦訳が文庫本で入手できるが、高橋の訳文には日本語として誤解を招きかねない箇所が多く、また、講義には自分の納得のいく材料で望みたいと考え、敢えて自ら訳出した。もとよ

り、筆者の思いこみや語学能力に起因する誤訳もあろう、諸兄のご批判を期したい。

『シッタールタ』(一九二二)と『荒野の狼』(一九二七)の間の数年間、ヘッセは独特のユーモアを湛えた作品を残している。『湯治客』(一九二五、ただし、その前身、一九二三年の初めてのバーデン滞在を描いた „Psychologia Balnearia oder Glossen eines Badener Kurgastes“ は一九二四年に限定出版されている)、『ニュルンベルクの旅』(一九二七)がその代表だろうが、「湯治客ヘッセ」の没落と再生を素材に作家の当時の思念の焦点であった「フモール」をシンメトリカルな構成に敵しくくつきりと定着させた前者、気ままな旅の記録といった寛いだ筆を装いながら、その「フモール」を常に視界に収めつつ、今度は一所定まらぬ旅の流れに重ね飄々と描き出した後者に比べ、このささやかな自伝は、とりわけその後半は、フモールそのものから産み出されたとも思える。掛け軸を見つめるうちに描かれた船頭に呼び掛けられ、思

わず吸い込まれそうになる幸田露伴『観画談』とは逆の趣向だが、ここには何処か東洋風の縹渺としたフモールが漂っている（『観画談』には、主人公「大器晩成」が山寺の一室で吹き降ろす夜雨に世界の音を聞く、『シッタールタ』結尾を思わせる条りもある、尤も「晩成」氏はその後、眠り呆けてしまうが）。

しかし、その笑いさんざめくようなフモールは、この小品でも「現実」をたわめる魔法である絵を描く喜びから導き出されるように、青少年期の嵐と戦時のやむを得ざる変容から抽出されたものであろう、作家の生涯の苦闘を柔和な微光に覆いつつもコントラストを際立たせている。『シッタールタ』の完成によって「内面への道」の往相を終えた後、ヘッセはその悟達を定着させるべく、『荒野の狼』へ言葉と意識を鍛えていったと筆者は考えるが、「短い自伝」の作家の言葉とは一見異なりながらも、フモールは「現実」をそのままに見据えつつ異なった次元に引き上げる唯一の抛り所であったように思う。ヘッセのフモールは現実

逃避の避難所ではない。

訳出のテキストはズールカンフ社版全集、Hermann Hesse: Gesammelte Werke in 12 Bänden (一九八七) 第六卷、三九一―四一一ページを用いた。